

「みち」

21生 平野 詩歩

人は皆 自分だけの道を求めて彷徨っている
地図を持たない僕らは おんなじ世界の中で
道なき道を行くしかない 無知な旅人

変わらなければ進めないこと 分かっている
この場所で足踏みをして 一步を躊躇うのは
変わらないことを笑うくせに 変わることを恐れてる
そんな矛盾する心に ホントは気づいているから

振り向けば これまで歩いてきた道が
君の過去は 確かにそこに在って
足元を見降ろせば そこには今の君が在るけど
顔を上げた君の視線の先に広がるのは
期待と不安の入り混じる 未知な無数の道ばかり

誰かと比べて 肩書きを気にして 劣等感
そんなことに何の意味があるのだろう
それぞれがそれぞれの道を歩むこの世界で

もし君が 今に自信を持てず 迷うのなら
5年先 なりたい自分を 思い描いてみて
今するべきことが 見えてきたその時に
次の一步を きっと踏み出せるだろう

ひとつだけ確かなことがある
君が一步踏み出した先が 君の道になる

「バック・トゥ・ザ・フューチャー」

21生 久住 忠彦

この号を作成するため、後期は「飛翔」編集室に一人でこもることがよくあった。誰も見ていないとなると、手を抜くのが悪い癖で、編集室でも真面目にパソコンに向かうこともあれば、携帯をいじったり、編集室にあった少女マンガを読んだり、くだらないことを考えたりする時間も多かった。

その流れで、自然に行き着いたのが、「飛翔」のバックナンバーである。几帳面にファイリングされているそれらを開いてみたとき、まず思ったのが、企画の面白さである。どれもこれも、学生目線の記事であり、様々な工夫がこらしてあり、ポイントを上手く突いた目の付けどころであり、そんな記事が面白くないわけがなかった。

昔の記事を見ると、よく知っている先生の若かりし頃があれば、10年以上前のオリキャンのレポートがあったり、写真の学生の髪型や服装から、そして「飛翔」本文に使われている今より若干薄くペラペラな紙からも、時代を感じてしまう。

昔の編集委員は今より少し多かったんだと知った。アメリカへ行った旅行記や、いじめに関しての座談会など、今とは少し趣向が違っている。そして、日本社会とも関係あるだろうが、学生が明るく、創造的エネルギーに満ちているように、記事の背景から感じた。

昔は頑張ってたんだな、という思いと、彼らよりもっといい「飛翔」をつくりたい、という思いがでてきた。自分で考えて、そしてみんなの意見を出し合って、色々な個性が溶け合った、総科らしい「飛翔」をこれから作っていききたいと思う。

『みぞれ』に思う

21生 林田 啓誉

今回紹介する詩は、約25年前にとある高校生が書いた詩である。九州出身の私からすれば、雪がふる＝みぞれがふる、であった。通学路では靴も濡れ、雪遊びはおろか雪合戦すらできず、更には洗濯物も干せない。単なる寒さの象徴。皆から嫌われていた何とも哀れなみぞれさん……。

重く澱（よど）んだ空から落ちてくる みぞれ

白くすきとおる冷たさは

雪にはなれず 雨にももどれない 中途半端な哀（かな）しみ

〈自分とは何かと考えていた、雪の降り積もったとある朝。〉

降っても降っても

決してつものこない

たどりつけない想いに こみあげる涙のように

それでも落ちてくるあめゆき

〈ゴールの见えないレースを走っているような、将来に対し不安を抱

きながら、悶々と毎日を過ごしていた。〉

わたしはいったい何者なのだ――

答えるものがない闇の中で 一心にさがしつづけ

狂わんばかりの激しさで

あとからあとから 降ってくる落ちてくる

〈自分が誰なのか、いったい何のためにこんな生活を送っているのか。いくら考えても答えは出ず、もうなにもかも投げ捨ててしまいたい、この中から逃げ出したい、そう思う時もあった。〉

けれどいつしか夜が明けて

みぞれは雪に変っていた

確かにそこにつもっていた

大地と同じ広がり

ほんとうの白さで輝きながら

〈しかし、たとえ今の自分が嫌いでも、それは未来の自分に繋がる自分。それは変えられない事実なのである。明日の自分は今日の自分とは違うのだ。だから、今日の自分を大切にしよう。〉

そんなことを思いながら、臨時休講の間に、友達と雪だるまを作っていた。

今年一番の積雪。

広がった銀世界。

心が一気に洗われた朝だった。

去年の夏、僕は部活の仲間と一緒に韓国を自転車ですべて走ってきました。船で釜山に渡り、そこから6日かけてソウルへ。交通マナーはあまり良くなく、バスに轢き殺されそうになったのも一度や二度ではありませんでしたが無事ソウルまでたどり着くことが出来ました。道中いろんな事がありました、印象的だったエピソードをいくつか紹介します。

○韓国料理の洗礼

走り始めて初日の晩、鍋屋に入ってメニューを開くと真っ赤な鍋料理の写真が載っている。店主に「これ辛いですか？」と聞くと、「辛いない、辛い！ ○△☆◎■……！」と言われたので注文すると、とても辛く辛いものが出てきた。僕達が苦しみながら食べているところを見て店主は爆笑していた。

○親切すぎるおじさん

焼き肉屋で店主に「どこ泊まるの？」と聞かれ、「隣のチムデルバン（健康ランドのようなところ）です」と答えると「そこはやめておけ」と言われ地図を引っ張り出し別の店を紹介されるが場所がいまいち分からない。すると、店主は店の奥から自転車を引っ張り出してきて「ついて来い！」と言うやいなや夜の街に飛び出して行ってしまった。人込みを自転車のベルで蹴散らして道を作るおじさんを追いかけ、やっと到着するとおじさんは値段の交渉を始めており、さらには自転車を店の中に入れてくれるように言ってくれた。おじさんは最終的に服を脱ぐところまで付いてきた。

○大量の桃

とある街で露店の桃を買おうと思いおばさんと交渉した結果、10個で3000ウォン（300円弱）だったので「半分でもいいから半額にしてくれ」と言ったら値段だけ半額になってしまった。しかも数えたら12個も入っていた。自転車で持ち運べないので一晩で1人当たり4つも食べることになった。

総じて、韓国の人たちはとても親切で、食べ物は美味しく、田舎の風景はおだやかで、韓国はとてもいい国でした。韓国に旅行に行ったときは、少し足を延ばして観光地の外に出てみるのもいいと思います。韓国の違った側面が見られますよ。

「続・心にうつりゆくよしなしごとを……」

20 生 山谷 義貴

前回の「飛翔な日々」で「心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく」書いてみたが、覚えてくださっているだろうか。あの時、僕のニックネームが「よしピー」であると紹介した。前回に引き続き、「よしピー」こと山谷義貴が、「心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく」書いてみたいと思う。

広島県で電車やバスを利用するとき、運賃の支払いに使える非接触式ICカードが2種類ある。ひとつはJRの「ICOCA（イコカ）」、もうひとつは路面電車・アストラムライン・バスなどの「PASPY（パスピー）」である。これらのカードを財布に入れておけば、乗り降りの

ときに改札機や読み取り機に財布をタッチするだけで運賃の支払いが完了する。実に便利なシステムだ。ちなみに、全国で最初にこのようなカードを導入したのは、東京でも大阪でもない、広島の「スカイレールサービス」なのだ。雑学程度に覚えていると、この先どこかで役に立つことが……普通に生活している分には、ないと思う（笑）。

さて、前回の号の特集記事中でも触れたが、僕は鉄道ファン、いわゆる「テツ」である。バスファンでもある。ならば、ICOCAやPASPYは当然持っているはずだと思いのことだろう。ところが、実はこれらのカードは持っていない（正確には、「ICOCA」を持ってはいないが、使っていない）。なぜか。それは、「使い終わった切符やバスカードを集める趣味があるから」である!!

使い終わった切符は、改札口で申告すれば記念に持ち帰らせてもらえる。また、バスカードには様々な絵柄のものがあり、集めだすとなかなかおもしろい。しかし、ICOCAを持ってしまうと、切符を買う必要がなくなるので、使い終わった切符を記念に残すことなんてできない。PASPYを持ってしまうと、必然的にバスカードを買わないことになる。そういった理由から、僕は「あえて」、「鉄道ファンやバスファンであるがゆえに」、ICOCAやPASPYを持たずにいるのだ。

ところが、最近PASPYの普及に伴ってバスカードの廃止が近づいている。本当は昨年10月いっぱいバスカードの販売が終了するはずだったが、幸か不幸か(?) PASPYの品薄状態が続いているのとこのとで、バスカードの販売は現在(1月)も続いている。しかし、次回の号が発行される頃には、きっとバスカードの販売が終了し、僕の財布にもPASPYが入っていることだろう。これが時代の流れなら致し方な

い。そもそも、僕のニックネームは「よしぴー」であるのだから、本来は「PASPY」とも「〇〇ぴー」つながりで積極的に仲良くしていくべきなのだろう（笑）。

結局のところ、僕は使い終わった切符やバスカードを手元に残すためにICOCAやPASPYを避けているのであって、決して、「乗り降りのときに改札機や読み取り機に財布をタッチするだけで運賃の支払いが完了する」というシステムそのものを嫌っているのではない。むしろ、こういったシステムを利用することに憧れている。とりあえず今はそれよりも使い終わった切符やバスカードを手元に残すことを優先しているわけだが、本当は「ピッ!!」と財布をタッチして運賃を支払いたくてたまらない（笑）。そんな僕にとつて、昨年末に学生証が更新されたことはものすごく嬉しかった。ご存知の方もあらうかと思うが、生協の組合員証の機能も学生証に載り、生協での支払いは学生証を入れた財布を読み取り機にタッチすれば完了する。

そんなわけで、新しい学生証で初めて生協での支払いを行ったとき、どれだけ晴れがましい気分であったことか（笑）。その後も、支払いが楽しくてたまらない。だからきつと、近い将来PASPYを使い始めた暁には、そのとたん、どうしても早くPASPYを買わなかったのだらうと後悔するのだろう。何とも身勝手なことである。

【後日談】「生協での支払いは学生証を入れた財布を読み取り機にタッチすれば完了する。」と書いたが、ある日生協のレジで「カードの磁気が弱いので、できれば財布越しではなく直接タッチしてもらえないか」と言われてしまった。僕の認識が誤りでした。皆さん、真似をされないようにお願いします。

「ニックネームの功罪」

19 生 中村 洋平

講義中、メールの本文、余暇時間。いろんな時に、いろんな所で、いろんな人に呼ばれる「がり」というニックネームを私が拝命したのは、大学1年の春。正確には小学校6年生の頃についたあだ名でその意味というのは……という話せば長い話は、今はどうでもいいので割愛します。

入学して3年。ニックネームで気軽に呼び合えるおかげもあってか、仲のいい友達も出来ました。その一方でオリキャンで同じ班だったのにすっかり縁の切れてしまったような人もいます。そんなみんなが、「がり」と私のことを呼んでいるのです。別にそのニックネームが嫌いなわけじゃありません。でも、いつまでも「がり」じゃ、いられないんですよ。……いや、メタボリックシンドロームとかではなくて。

私も遠くない将来、社会人になります。せめてその時、一緒に卒業しなければいけないのです。きつと。そうしたら、いままで仲の良かった友人になんと呼んでもらえばいいのでしょうか？ なんと呼べばいいのでしょうか。彼の、彼女の名前は知ってます。でも、呼んだことがない。ニックネームと一緒に友人にもサヨナラを言わないといけないなんて、そんな道理はありません。でも、今、そんな分岐点に立たされているような気がします。

サークルや、バイトでは名前呼びあっています。友人であり、同時に仲間であるのです。私は、20年くらい生きたところで、初めて人を「名前」で呼びました。記念すべき第1号の彼はサークルの同輩でした。いままでのすべての人が「〇〇くん」、「〇〇さん」で、……だからと

いつて今まで呼ばれていたのが全部気のせいとかそういうわけじゃないのですが、そうではないのですが、初めて、気の置けない仲間に出会った気がしたのです。

決して他の信頼していないとかそういうわけじゃないのです。

ただ、大学生になったあの頃よりも今の私は、私たちは一歩踏み出しておきたいと思うのです。それが、明日の自分を作るような。そんな気がしています。

「思い出したこと」

20 生 山崎 弦太

飛翔な日々のバックナンバーにあだ名をテーマにしたものがあつたのを見て、僕はふと思い出しました。それは小学校1年生の春の下校途中のことで、僕たちはそれぞれのあだ名を決めていたのです。誰かが僕に「やまさきだから、”やっち”だね」と言いました。それから、みんなは「僕はたかひろだから”たっち”だ」とか、「あつろうだから”あっち”だ」とか、“かっち”だとか“みっち”だとか口々に言うのです。その時、たきおかさとし君が、「たきおかだから”たっち”だ」と言いました。でも“たっち”はもうほかの人のあだ名になっていて、みんなはそれを指摘しました。「たきおか君はどうするのかな。さとしだから”さっち”にするのかな」と僕は様子を見ていたのですが、その時たきおか君は言ったのです。「僕はたきおかだから、”たつき”ね。」

それから、たきおか君とは高校を卒業するまで一緒だったのですが、僕はずっと尊敬の目で見ていたのです。